

P9-273

授乳室を利用する褥婦の育児行動とその不安の関係

葛飾赤十字産院 4階病棟

○遠田 朋子、安田 裕美子、長谷山 政代、高森 美幸、石川 幸

【緒言】葛飾赤十字産院では4年前から畳の授乳室を作った。ここでは、ソファ、布団が設置され、添い寝など自宅のような雰囲気の中で24時間使用でき、母親同士の交流や看護スタッフに自宅を想定した質問など核家族化での育児に役立っている。本調査は褥婦が授乳室を利用することで育児行動とその不安についての関係を明らかにし、授乳室の利用促進に役立てたいと考えた。

【目的】授乳室を使用した頻度による、育児行動とその不安の関係を明らかにする。

【方法】当院に入院し調査に同意が得られた褥婦131名。データ収集期間は平成20年10月～12月。調査方法は自記式アンケート調査。質問は属性、育児行動について14項目、授乳室使用頻度を「毎回」～「なし」の6段階、不安についてはスケールを用い0点（すごく不安）～5点（まったく不安は無し）と点数化し尋ねた。倫理的配慮は調査の趣旨、データは記号処理すること、途中棄権しても不利益を被らないこと、本調査以外にデータを使用しないことを説明し、回収をもって同意を得た。

【結果】有効回答は68名（51.9%）であった。参加者は初産婦が32名（47%）、経産婦が36名（53%）であった。初産婦は授乳室利用頻度が「毎回」と答えた者が「授乳回数」31.7点、「おっぱいのトラブル対処」2.07点、「児の着替え」3.31点、「児が泣いたときの対応」2.73点と高かった。経産婦はどの育児行動も授乳室利用頻度が「毎回」と答えた者は他の回答より低かった。

【結論】初産婦は12項目の育児行動において、授乳室利用頻度が高い者の得点が高く、不安が弱かった。経産婦は10項目の育児行動において、授乳室利用頻度が中程度の者の得点が低く、不安は強かった。初産婦では、授乳室利用頻度からみた育児行動と不安には違いがあった。

P9-275

新生児ドライテクニック導入後の検証

長野赤十字病院 看護部 B5

○小林 由佳、米澤 美代子、岡田 さち子、竹村 豊子

【はじめに】近年、新生児清潔法は、感染や皮膚トラブルの減少等の利点から、沐浴よりドライテクニック（以下DT）が推奨されている。当院でも上記目的でDTを導入したが、分娩時の血液や羊水が児の体や頭皮に残り、不潔と感ずることがあった。これは、DTの詳細なマニュアルがなく、スタッフにDTの知識が浸透しておらず、清潔意識や手技に差があるためではないかと考えた。そこで、今回DTのマニュアル改正し、スタッフに働きかけDT方法の統一を図った。

【研究方法】病棟スタッフに独自作成したアンケートを実施。倫理的配慮を説明し回答をもって同意とした。1回目回収後、現状把握、問題点を抽出しマニュアル改正と勉強会実施。その後2回目実施。沐浴群152名、DT群147名の皮膚トラブルを調査分析。

【結果・考察】1) アンケート 血液や羊水の汚れに対して、マニュアル改正後「全て拭き取る」が増え「拭き取るが取れないこともある」が減少した。また、疑問点も減少した。これはDT導入時、スタッフ間での伝達を主としたため、スタッフの経験や清潔意識の差から情報統一が図れず、手技に差が生じたためと考える。マニュアル改正や勉強会はDT手技統一や清潔意識の向上に有効であった。しかし、血液と羊水は「感染源」として扱うべきであり、それらが残っていることは問題である。今後は感染対策の観点からも働きかけが必要と考える。2) 皮膚トラブル DT群と沐浴群に有意差はないがDT群の方が少なかった。膿疹・水疱・湿疹・ただれは、沐浴群2人、DT群6人、発生部位は皮膚接触部（腋窩・頸部）であり、そこには胎脂がそのまま残っていた。胎脂が乾燥しないまま残っていることも皮膚トラブルの要因になると考えた。腋窩や頭部のみでなく皮膚接触部の清潔を保つ働きかけが必要と考える。

P9-274

NICUに入院した子どもを持つ母親への母乳育児支援～電動搾乳器を導入して～

葛飾赤十字産院 NICU

○山田 香織、宜野座 理代、吉村 園子、田中 浩子、久保田 由美

【緒言】早産によりNICUに入室となった母親は、子どもが直接授乳をできるようになるまでの数か月間、母乳分泌を維持することが課題である。当院NICUでは2008年1月から電動搾乳器による母乳育児支援を開始した。

【目的】電動搾乳器使用者の使用実態と母乳栄養の継続状況を明らかにする。

【調査方法】NICUに入院した子どもの母親で、電動搾乳器をレンタルした母親9名とその子どもの診療録、看護記録から以下の項目（母親の分娩歴、子どもの出生週数・体重、入院日数、レンタル開始の理由と時期、使用を勧めた部署、退院前1週間の授乳状況、退院時の体重、1ヶ月健診時および3、4ヶ月健診時の乳状況と体重）に沿って収集した。

【倫理的配慮】調査参加者には、調査の任意性、個人情報の保護、得られたデータの管理、匿名性の確保について説明文書を郵送し、署名の返送を得て同意を確認した。

【結果】子どもの出生週数の平均は31.54週（±4.02週）、出生体重の平均は1362g（±445.24g）、入院日数の平均は61.8日（±46.34日）であった。レンタル開始の理由は、母乳分泌維持と身体的負担の軽減が主であった。母乳継続状況は、退院前1週間・1ヶ月健診時ともに人工乳のみの哺育の子どもはいなかった。3～4ヶ月健診時には、1名以外は母乳分泌維持ができていた。

【考察】母親にとって搾乳に伴う苦痛は身体的負担だけでなく、有効な搾乳の減少によりその後の乳汁分泌低下に繋がる要因ともなる。NICUに入院した子どもは平均2ヶ月、長くて半年の入院を要することから、長期間の母子分離状況において電動搾乳器の果たす役割は大きい。

【結論】NICUに入院した母親にとって電動搾乳器は欠くことのできないツールである。

P9-276

間質性肺炎合併の肺癌末期患者の外出～NPPV機器の選択と家族への支援～

石巻赤十字病院

○菊池 美咲、高橋 恵美子、高橋 純子

【はじめに】FIO₂0.9でNPPV装着中の肺癌末期患者が、死を覚悟し自宅への外出を強く希望した。NPPV機器の選択と家族への支援により外出できたので報告する。

【事例紹介】70歳 男性

肺癌、化学療法後に間質性肺炎合併。増悪を繰り返しNPPVを使用。呼吸不全が進行し、家族に余命数日と宣告。死期を察して身辺整理をしていた患者は外出を強く希望。

【外出の目標】安定したSpO₂を維持しながら、家族との会食・団楽ができる

【外出のための看護介入】1. NPPV機器や酸素の準備：ME等の多職種や業者と連携し、NPPV機器や大型酸素ボンベの手配

2. 家族への介入

1) 外出受け入れの意思確認をし、患者への対応の仕方、留意点、急変のリスクに関して説明

2) 外出中の過ごし方について共に検討

3) 自宅状況の確認と移動手段となる介護タクシーの手配

3. 患者への説明：患者の状態を最終確認し、当日に外出することを伝える

4. 呼吸状態悪化時の対応策：主治医と看護師が同行できるように申請し業務調整

【結果】家族は外出に意欲的であり、自ら兄弟を集め食事の準備を行っていた。ベッドで外出する予定で寝台車を準備していたが、当日患者が車椅子を希望し急遽介護タクシーを手配した。自宅滞在時間90分、移動時間を含めて140分間の外出となった。SpO₂89～94%を保ち、呼吸状態に異常なく経過した。外出中、飲食や写真撮影なども行い家族と団楽の時間を過ごすことができた。

【考察】NPPV機器は、MEを含めた医療チームでの検討により適切な選択ができた。また、末期患者の外出は家族の協力が必須であり、看護師による動機付けと支援が有効であった。

【結語】適切なNPPV機器の選択と家族への支援により、肺癌末期の重症呼吸不全患者が外出できた。